

正通寺たより

令和六年年末号

正通寺のいちよう

明治六年の「正通寺絵図」（いまは見当たりません）

という資料におよそ三メートルほどの木が描かれていますので、江戸末期には植えられていたようです。いちようの別名は多いですが日本では知られていませんが中国では仏指甲という名前があります。これはぎんなんの殻を半分に割ったところから名づけられたものと思われます。ぎんなんは漢方薬としても用いられました。古来から身体と心に有効な樹木としてお寺に植えられていたようです。火事から建物を守るともいわれています。大切にしたい正通寺のシンボルです。



正通寺の開祖
理源大師聖宝尊師



「正通寺縁起」に光孝天皇の仁和元年（八百八十五年）に理源大師聖宝尊師（しやうぼうそうし）が諸国巡歴の時、土師の桂山に至り、その地はお寺をたてるのにふさわしいとして「桂山寺」を建立したのが正通寺のはじまりです。

理源大師は天長九年讃岐で生まれ、弘法大師の弟の真雅師の弟子となり、奈良の東大寺東南院（現在の東大寺の本坊）に住んで仏教を学び、後、京都山科に醍醐寺を開きました。聖徳太子のうまれかわりという伝説もあります。正通寺ではこの師の教えを大切に伝え、「開山大師」として奉っています。